

スポーツ教育を専攻する女子大生が有するダンスイメージの 5年間の比較

The comparative study on dance images of female university students in physical education
between 2012 and 2016

寺井 美津子¹⁾・葦原 摩耶子²⁾

Mitsuko TERAJ・Mayako ASHIHARA

要 旨

2012年度実施の学習指導要領により、中学校1・2年生で、男女ともダンスが必修化されたが、教える教員側には戸惑いがみられ、ダンス指導特有の不安があると報告されている。この不安を減少させるためには、教職課程を有する大学のダンス指導法が大きな鍵を握る。本研究では、イメージが人間の行動を規定する一因となることから、ダンス必修化移行期にあたる2012年から2016年までの5年間に入学した大学生が、入学時に抱えているダンスに対するイメージを明らかにし、経験者数の割合との関係を検討した。その結果、「ダンス＝楽しい」というイメージが圧倒的に多く、「カッコイイ」、「きれい」などの肯定的イメージと、ダンス要素を示す「表現」が、5年間に共通して出現した。一方、「苦手」、「難しそう」、「難しい」などの否定的なイメージを持つ学生が、ダンス経験に関係なく一定の割合で存在した。また、経験者の割合が多いほど、イメージが多様になり、ダンスの本質を表すイメージが多くなることが、確認された。ダンス指導時に起きる不安を解消するには、大学を含めた学校場面で、多様なダンスを経験し、自分に適したダンス表現を知ることが重要だと示唆された。

キーワード：ダンス、イメージ、内容分析

はじめに

2012年より現行学習指導要領が完全実施され、中学校1・2年生の保健体育において、ダンス、武道が男女とも必修化された。この学習指導要領は、約60年ぶりに改正された教育基本法で示された、21世紀を切り拓く心豊かでたくましい日本人の育成を目指すという観点から改訂さ

れ、平成10～11年改定時に示された「生きる力」という理念を継承し、確かな学力、豊かな心や健康やかな体の育成のための指導の充実などをその基本的な考え方としている¹⁾²⁾。保健体育科においては、生涯にわたって豊かなスポーツライフを実現する基礎を培うことを重視した改訂となっている。

1) 神戸親和女子大学 発達教育学部 ジュニアスポーツ教育学科 非常勤講師、藤田佳代舞踊研究所
2) 神戸親和女子大学 発達教育学部 ジュニアスポーツ教育学科

このうち、中学校保健体育科改訂の趣旨において、改善の基本方針の体育についての項で「体を動かすことが、身体能力を身に付けるとともに、情緒面や知的な発達を促し、集団的活動や身体表現などを通じてコミュニケーション能力を育成することや筋道を立てて練習や作戦を考え、改善の方法などを通じて論理的思考力をはぐくむことにも資する」と記されている³⁾。これは、改訂要領で示されている思考力・判断力・表現力等の育成のバランスを図ることを中学校の保健体育にも反映させたものだが、身体全体を使ってイメージを表現するダンスという種目の持つ特性に大いに合致するものと考えられる。ダンスは、仲間と一緒に全身を動かし、より良い表現を求めて話し合い、意見を戦わせながら、表現するイメージに沿ってダンスを創作していき、それを踊り手全員で協力して完成させ、発表する。そして、これをみた観客とダンスイメージを共有する。この一連の過程は、改善の基本方針で示された身体能力、情緒的知的発達、コミュニケーション能力、論理的思考力のすべての面を育むことができる。

しかしながら、実際の現場では、ダンスの指導に戸惑いが感じられる。公立中学校の2014年度授業計画で、ダンス指導法研修・教材研究を「実施している」が約20%、「しているが不十分」が約40%、「これからする予定・したいができない」が約20%であるという調査もあり⁴⁾、ダンス指導に対して、十分な対応が出来ているとはいえないようだ。指導経験の少ない教員の授業では、現代的なリズムのダンス指導において、既成のヒップホップ作品を映像で与え、定型の踊り方を習得させている場合も少なくないとの報告もある⁴⁾。これでは、せつかくのダンスで培われる多様な側面に対する効果を得ることは、難しい。

ダンスは、誰にでもできる。1980年代後半からヒップホップなどのリズム系ダンスが盛んになり、それまでのダンス＝女性的というイメージが薄れ、男女を問わず皆が楽しむものとなってきた。車椅子ダンスはおおよそ60年前にデュオ形式で始まり⁵⁾、障害者ダンス大会、公演もたくさん

開催され、身体的、知的に障害を持つ人にとっても身近なものとなっている。ところが、いざ教えるとなると、不安を感じる教員が多く、指導に困難を感じる。これを解決するため、ダンス指導法、特に、保健体育科の教職課程を有する大学においてダンス指導法の授業を充実させるための研究が急務となっているが、変化に対応した指導法の研究はまだ不十分と考える。

イメージは人間の行動を規定する要因の一つである⁶⁾。イメージは、準知覚的ないし準感覚的経験、つまり、視覚的、感覚的、感情的などの過去の経験によって体験された情報が自己の記憶を手がかりに意識レベルで想起され、再生されるものだと考えられている⁷⁾。ダンスを踊る楽しさや喜びを味わうためには、まず、指導者がダンスに肯定的なイメージを持っていることが重要であり、指導が上手くいくかどうかの大きな要因となる。中村は⁸⁾、ダンスを履修した大学生が将来教職に就いた場合、創作ダンスを教えたいか現代的リズムを教えたいと思うかは、それぞれの種目で踊る楽しさを味わえたかどうかによることを明らかにしている。指導者がダンスを肯定的にとらえて、量的にも質的にも豊かなダンス経験を持つことが、ダンスに対する肯定的イメージを生み、指導に生かされていく。大学のダンス指導法の授業において、ダンスに対する肯定的イメージをつくること、将来のダンス指導不安を軽減させることにつながると考えられる。ダンスに対して肯定的なイメージを持つためには、まず、学生が持っているダンスに対するイメージの実態を明らかにすることが必要である。

このため、本研究では、保健体育科教職課程を有する大学に2012年度から2016年度までの5年間に入学してきた大学生が抱えているダンスイメージを自由記述で調査し、その変容を比較検討することで、大学入学以前にダンスに対してどのようなイメージが形成されているのかを明らかにする。また、過去のダンス経験の有無とも照らし合わせてダンス経験とダンスイメージの形成を検討する。2012年度から2016年度までの大学入学

生は、中学生の時期が、中学校1・2年生男女のダンス必修化移行期にあたる。この5年間の大学生が、ダンスに対して抱いているイメージを明らかにし、比較検討することは、今後のイメージの変容を推測でき、肯定的なイメージを持てるダンス指導法の開発に向けての示唆を得ることができるものと考えられる。

方 法

1. 調査対象者

KS女子大学発達教育学部ジュニアスポーツ教育学科、ダンス受講生（1年生、但し2013年度に2年生2名、2016年度に国内留学生1名を含む）を対象とした。回答が不備なものを省き、2012年度62名、2013年度78名、2014年度74名、2015年度70名、2016年度63名、計347名の回答を得た。

2. 方法

ダンス授業初回時に、ダンス、踊り、舞踊のイメージとダンス経験の有無について自由記述で回答を求めた。

3. 分析方法

1) テキストデータの分析

本研究ではKHCoder⁹⁾を利用し、自由記述データから語を抽出し、その共起関係を調べた。KHCoderは、アンケートの自由記述・インタビュー記録・新聞記事など、さまざまな社会調査データを分析するために制作されたテキスト型(文章型)データを統計的に分析するためのフリーソフトウェアである。「計量テキスト分析」または「テキストマイニング」と呼ばれる方法に対応している。形態素解析器として「茶筌」を用いており、精度の高い単語抽出を行うことができる¹⁰⁾。

手続きとしては、収集した自由記述を入力後、コーディングルールを作成した。自由記述データにおいては、同一内容を表す語であっても、ひらがな、漢字、カタカナと表記が異なっているもの、表現が違うものがある。また、一語と考えられる

語が分割して抽出される場合もある。本研究では、ダンス、踊り、舞踊のイメージを自由記述で回答するように求めたため、主語になっている「ダンス」、「踊り」、「舞踊」と述語になっている「イメージ」という語は削除した。その他、表1のようなルールを作成した。

表1 Khcoderコーディングルール

表記の統一	強制抽出リスト
楽しい←たのしい	運動量
カッコイイ←かっこいい、かっこよい	達成感
激しい←はげしい	楽しそう
難しい←むずかしい、ムズかしい	難しそう
柔らかい←やわらかい	面白そう
面白い←おもしろい	楽そう
可愛い←かわいい	リズム感
ドキドキ←どきどき	HIPHOP
合わせる、合う←あわせる、あう	よさこい
使う←つかう	阿波踊り
踊る←おどる	創作ダンス
見る←みる	社交ダンス
華やか←はなやか	ソーラン節
凄い←すごい	爽快感
きれい←キレイ	自己表現
要る←いる	一体感
乗る←のる	振りつけ
作る←つくる	一致団結
出来る←できる	アクロバティック
出る←でる	みんな
HIPHOP←ヒップホップ	
キレ←きれ	
伝統←でんとう	
体←からだ	
揃う、揃える←そろう、そろえる	
こまかい←細かい	
鮮やか←あざやか	
みんな←皆	
みんな揃えと←みんながそろうと	

2) 統計分析

年度ごとのダンス経験の有無、語数の分析について、 χ^2 検定を実施した。分析にはjs-STAR version 8.0.1.jを使用した。

結 果

1. 抽出された語によるダンスイメージの検討

表2で示されたように、5年度すべてに共通するイメージ語は、「楽しい」で、各年度とも50%前後の回答数があり、圧倒的に多かった。「楽しい」

以外で5年度すべてに共通するイメージ語は「カッコイイ」、「表現」、「きれい」、「リズム」、「笑顔」で、ダンスへの肯定的な志向性を示す言葉とダンスの要素を指す言葉であった。

ダンス表現の主体である「体」の出現回数は、ダンス経験者割合が90%以上であった2012年度5回、2014年度8回、2015年度15回で、ダンス経験者が比較的少ない2013年度と2016年度は1回であった。

また、ダンスへの否定的なイメージである「難

しい」、「難しそう」、「苦手」という語も各年度で出現している。「協力」、「一致団結」、「全体」、「合わせる・合う」、「揃う・揃える」、「みんな」等の全員で踊るイメージを表す語も各年度で見られる。

また、「伝統」、「日本」、「国」、「昔」など伝統的な舞踊をイメージした語もみられた。

2014年度には「HIPHOP」、「バレエ」などダンスの具体的ジャンルの回答があったが、他の年度でも、出現回数は1回ながら、ダンスの具体的な

表2 各年度別抽出語と出現回数（出現回数2回以上）

2012年度		2013年度		2014年度		2015年度		2016年度	
抽出語	出現回数								
楽しい	29	楽しい	26	楽しい	31	楽しい	25	楽しい	26
激しい	7	カッコイイ	15	カッコイイ	12	表現	17	カッコイイ	13
表現	7	楽しそう	14	体	8	体	15	難しい	5
きれい	6	表現	10	難しい	8	リズム	10	キレ	4
カッコイイ	6	きれい	7	リズム	7	カッコイイ	9	激しい	4
楽しそう	5	リズム	5	きれい	6	激しい	9	表現	4
凄い	5	激しい	5	楽しそう	6	楽しそう	5	きれい	3
体	5	出来る	4	華やか	5	使う	5	楽しそう	3
リズム	3	リズム感	3	みんな	4	自由	5	伝統	3
苦手	3	自分	3	リズム感	4	難しい	5	動き	3
元気	3	笑顔	3	合わせる	4	きれい	4	難しそう	3
思う	3	難しそう	3	美しい	4	みんな	4	美しい	3
笑顔	3	華やか	2	表現	4	音楽	4	リズム	2
揃える	3	楽しそう	2	元気	3	合わせる	4	協力	2
動く	3	合う	2	出来る	3	自分	4	国	2
踊る	3	使う	2	笑顔	3	動かす	4	笑顔	2
みんな	2	昔	2	全体	3	難しそう	4	面白い	2
ドキドキ	2	伝統	2	動かす	3	楽しむ	3		
華やか	2	面白い	2	HIPHOP	2	出来る	3		
見る	2			バレエ	2	全体	3		
合わせる	2			可愛い	2	明るい	3		
使う	2			楽しむ	2	リズム感	2		
柔らかい	2			使う	2	一致団結	2		
人	2			揃う	2	華やか	2		
動き	2			優雅	2	感じ	2		
難しい	2					個性	2		
日本	2					作る	2		
明るい	2					出る	2		
						笑顔	2		
						乗る	2		
						伝統	2		
						動く	2		
						表す	2		
						面白い	2		
						踊る	2		

ジャンルを表す語が出現している。

2015年度は、抽出語数が35語と最も多く、他の年度では見られない「自由」、「個性」、「作る」、「表す」などのダンス創作に関わる言葉が出現している。「音楽」というダンス周辺領域の語も見られた。

2. 年度ごとのダンス経験の有無やダンスイメージの語数の差の検討

ダンス経験の有無は、年度によって差があり、経験者の割合は2012年度95.2%、2013年度82.1%、2014年度95.9%、2015年度94.2%、2016年度74.6%であった。必修化されているにもかかわらず2016年度のダンス経験者が74.6%にとどまっていた。

出現回数が2回以上の語数についてみると、2012年度28語、2013年度20語、2014年度25語、2015年度35語、2016年度17語と年度によってばらつきが見られた(表2)。

そこで、まず、ダンスの授業受講時までにダンスの授業を経験したことがある者とない者の割合が年度によって差が見られるか、クロス集計、および χ^2 検定を用いて検証した。その結果を表3に示す。 χ^2 検定の結果、経験者の割合に、年度ごとに有意な差が見られた($\chi^2(4) = 23.97, p < .01$)。残差分析の結果、2013年度、および2016年度は経験者が少なく、未経験者が多いのに対して、2014年度は経験者が多く、未経験者が少なかった。

続いて、学生が自由記述に記載した語数に年度によって差が見られるかクロス集計、および χ^2 検定を用いて検証した。その結果を表4に示す。 χ^2 検定の結果、年度によって語数が有意に異なることが示された($\chi^2(8) = 19.56, p < .05$)。残差分析の結果、2015年度の学生は3語以上記入している者が多く1語が少なかったのに対して、2016年は1語の者が多く3語以上を記入したものが少なかった。

表3. 経験の有無と年度のクロス集計

	2012	2013	2014	2015	2016
あり	59	64	71	65	47
	1.83	-2.01*	2.28*	1.67	-3.80**
なし	3	14	3	4	16
	-1.83	2.01*	-2.28*	-1.67	3.80**

(上段が度数、下段が調整された残差) * $p < .05$, ** $p < .01$

表4. 語数と年度のクロス集計結果

	2012	2013	2014	2015	2016
1語	21	35	29	15	31
	-0.73	1.64	0.24	-3.19**	2.03*
2語	26	31	30	32	25
	0.04	-0.19	-0.24	0.76	-0.37
3語以上	15	10	15	23	7
	0.84	-1.75	-0.01	2.93**	-2.00*

(上段が度数、下段が調整された残差) * $p < .05$, ** $p < .01$

3. 抽出された語の共起関係からのダンスイメージの検討

KHcoderを使用して、年度ごとに分析した抽出語を共起ネットワーク図に表示した(図1～5)。この図は、抽出された語のうち出現パターンの似通ったもの同士を線で結んでいる。線は、共起関係が強いほど太い線で描画されている。また、出現数が多い語ほど大きい円で表され、フォントサイズも出現数に応じて変化している。それぞれの語がネットワーク構造の中でどの程度中心的な役割を果たしているのか、つまり中心性を円の色により、表示している。円の色は黒さが濃いほど中心性が高い。

1) 中心性

5年度すべてで出現頻度が圧倒的に高い「楽しい」は、2013、2014、2016年度でダンスイメージの中心的役割を果たしているが、2012、2015年度では、共起関係がなかった。2016年度は「楽しい」の他に「カッコイイ」も中心性が高く、この2語に共起関係がある。2012年度で中心性が高い語は「人」であり、次に中心性の高い「凄い」、「思う」、「カッコイイ」、「元気」と共起関係がある。2015年度はイメージ語数が最も多く、「楽しい」が出現頻度最多であるが、中心性の高い語は「使う」で、次に中心性の高い「体」、「リズム」、「楽しむ」と共起関係があり、「楽しむ」と「みんな」

にも共起関係が存在する。

2) 共起関係—結びつきの強さ

2012年度は、「見る」、「踊る」、「人」、「みんな」、「揃える」、「華やか」、「思う」が相互に結びついている。このうち、「人」が「元気」—「柔らかい」—「動き」と、「みんな」が「動く」と、「踊る」、「思う」が「きれい」と、「踊る」が「合わせる」—「リズム」—「ドキドキ」とつながっている。自由記述で「華やかで、みんなで揃えるときれいで、見ていると凄く楽しい気持ちになれる」や「踊る方は、見ている人が入り込めるような作品を考えるのが楽しいところだと思う」などと表されているものが反映されていると考えられる。また、「体」と「表現」、「カッコイイ」と「苦手」の共起関係も強いが、これは、「体で表現するもの」や「苦手だけけど楽しい、カッコイイ、あこがれ」などの自由記述と対応している。

2013年度は自由記述で「言葉を使わなくても自分の気持ちを表現できる」に代表されるように「表現」、「自分」、「出来る」、「使う」の4語が相互に結びついている。自由記述の「激しい、リズムに合っていたら自由に出来ること」や「音楽のリズムに合わせていろいろ表現する」、「リズム感が要る」などと対応している「リズム」と「合う」、「激しい」、「出来る」や「リズム」と「表現」、「リズム感」と「要る」に共起関係が存在する。これらとは独立して「楽しそう」—「伝統」—「昔」に共起関係がある。

2014年度は「体」と「合わせる」、「動かす」、「リズム」、「表現」、「全体」、「使う」に共起関係が強く現れ、「合わせる」、「動かす」、「リズム」の3語が相互に関連し、「表現」—「全体」—「使う」に強い関係が見られる。自由記述の「リズムに合わせて体を動かす」や「体全体で表現するもの」、「体を全体的に使う」などを表している。「出来る」—「可愛い」—「きれい」—「美しい」—「揃う」にも関係が見られる。この関係とは独立して「HIPHOP」と「バレエ」が関連している。

2015年度は、中心性が高く、出現回数の多い「体」と「表現」の共起関係が強い。「体」は「使

う」、「全体」、「動かす」、「合わせる」とともに現れ、「使う」、「合わせる」は「表す」とも共起関係が強い。「動かす」、「音楽」、「合わせる」と「全体」、「出る」、「個性」も相互に結びついている。「音楽に合わせて体を動かす」や「体全体を使って表現する、個性が出る」などの自由記述の現れと考えられる。「笑顔」—「乗る」—「踊る」、「全体」—「リズム感」、「自由」—「出来る」、「カッコイイ」—「難しい」も強く結びついている。これらとは独立して「みんな」—「一致団結」—「作る」に強い共起関係があった。

2016年度は「激しい」が「美しい」、「きれい」、「キレ」、「表現」と共起関係があり、「美しい」—「きれい」—「リズム」—「キレ」—「表現」にも結びつきがある。また、「笑顔」—「伝統」にも共起関係が見られる。

抽出されたイメージ語の中で、出現回数が多かった「難しい」、「楽しそう」、「難しそう」は、ほとんど単独で回答されていたため、この図には現れていない。

考 察

本研究では、中学生の時期が中学校1・2年生男女のダンス必修化移行期にあたる2012年度から2016年度までの5年間に入学してきた大学生の、大学入学以前に形成されているダンスイメージを明らかにし、これを過去のダンス経験の有無とも照らし合わせて、ダンス経験とダンスイメージの形成を検討することを目的に、自由記述によるダンスに対するイメージとダンス経験の有無を調査した。調査結果をKHcoderおよび χ^2 検定で分析し、検討した。

ダンスのイメージで最も多く記述されていたのは、「楽しい」で、各年度とも50%前後と圧倒的であった。質問紙形式によるダンスイメージを調査した先行研究の結果でも⁴⁾⁶⁾¹¹⁾¹²⁾¹³⁾¹⁴⁾、「楽しい」は高得点であったが、自由記述による今回の調査で、「ダンス=楽しい」というイメージが、まず存在することが明らかになった。また、各年度で共通に現れた「カッコイイ」、「表現」、「きれい」、

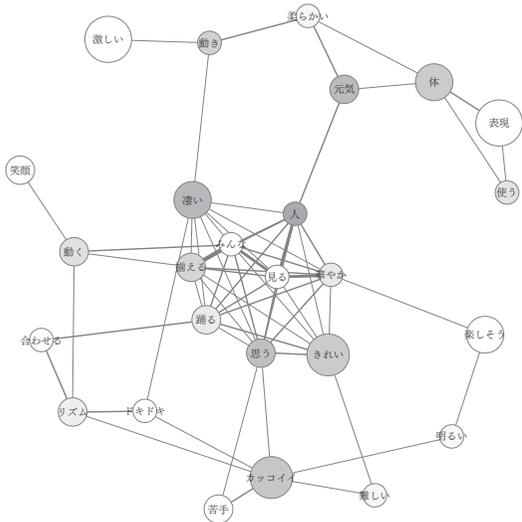


図1 2012年度ダンスイメージ共起図

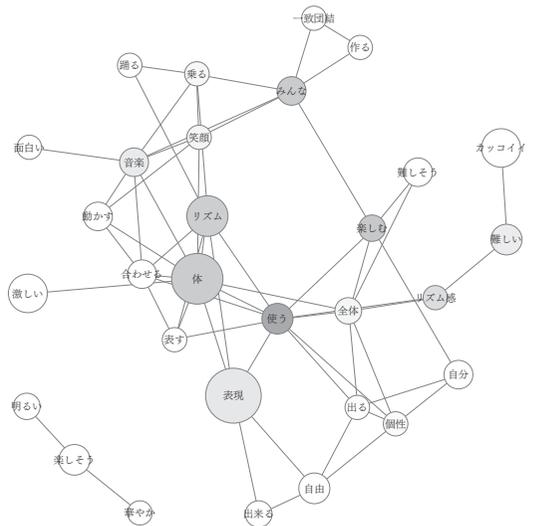


図4 2015年度ダンスイメージ共起図

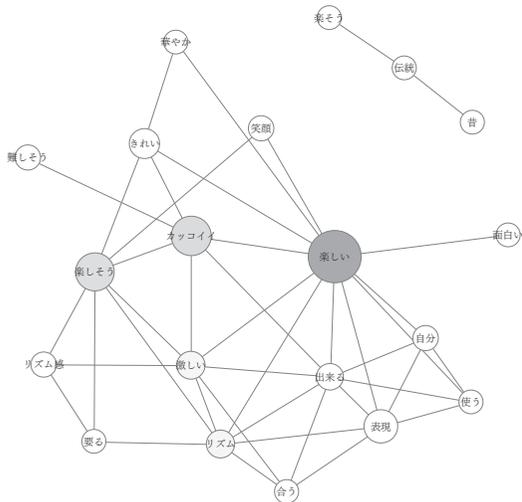


図2 2013年度ダンスイメージ共起図

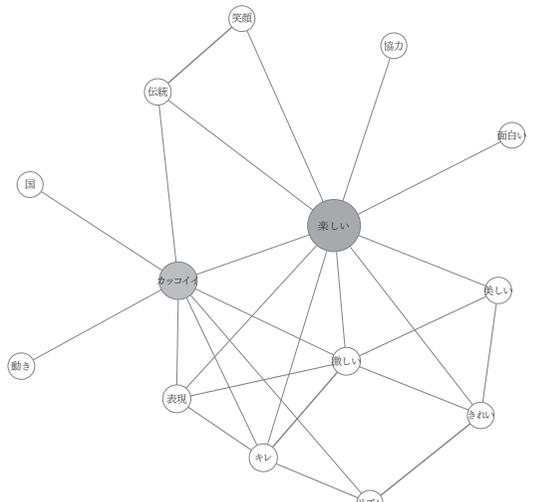


図5 2016年度ダンスイメージ共起図

バレコ — H/PHOP

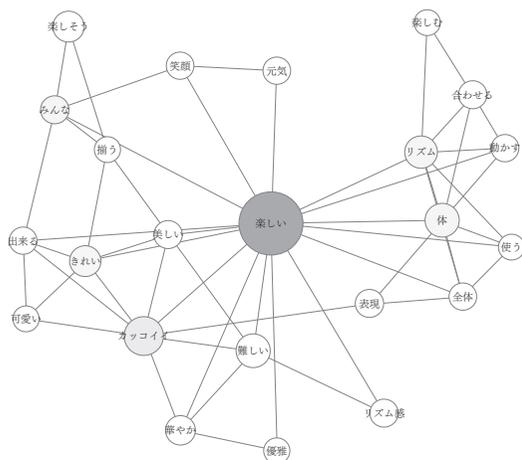


図3 2014年度ダンスイメージ共起図

「リズム」、「笑顔」も、質問紙形式による先行研究でも⁴⁾⁶⁾¹¹⁾¹²⁾¹³⁾¹⁴⁾ 高得点だった項目で、ダンスに対して肯定的イメージを持っていることがわかった。高等学校までのダンス授業での体験、ヒップホップダンスに代表される「カッコイイ」ダンスのマスメディア等を通じた視覚的体験など、大学入学時までのダンス経験により、ダンスに対して肯定的なイメージを形成しているものと思われる。学校において、現代的なリズムのダンスを履修する機会が増加していることも、一因であろう。ダンスの男女共修化、現代的なリズムのダンスの普及により、ダンスのイメージに性差意識が薄れているといわれているが⁶⁾¹³⁾、今回の調査で、「女性らしい」は全体で1回のみ出現であった。ほとんど性差意識は、無いようである。

一方、ダンスに対する否定的イメージを表す「難しい」、「難しそう」、「苦手」等の語は、いずれの年度でも出現している。これらの否定的イメージ語は「カッコイイ」、「楽しそう」と共起関係があった。ダンスを見ていると「カッコイイ」、「楽しそう」だが、自分が実際にダンスをすると「難しい」、「難しそう」、「苦手」であることを表しているものと考えられる。

経験者数の割合は、5年度中3年度で90%を超え、ダンス必修化が進みつつあることがうかがえる一方で、2016年度が74.6%にとどまっている。これは、現場によって、ダンスの授業に対する準備不足などにより、ダンス授業の実施に差が出ているのではないかと、推測される。

経験者が90%を超えた年度は、回答語数も多く、イメージ語も「楽しい」に代表されるダンスへの志向性を表す語に加え、「体」、「表現」、「個性」等のダンスの本質を表す語や、「みんな」、「一致団結」、「揃う」等のダンス創作に関わる語が、出現している。しかし、未経験者の多い年度では、回答語数も少なく、ダンスへの志向性を表す語が、ほとんどであった。このことについて、他の年度に比べて未経験者が有意に多かった2016年度と、経験者の割合が有意に高い2014年度とを比較すると、2016年度は、他の年度に比べ、ダ

ンスイメージ語の出現回数2回以上の語数が少なく、1人の学生が回答した語数も1語の者が有意に多く、3語以上回答したものが、有意に少なかった。共起関係を見てもわかるように、それぞれの語の共起関係が弱い。「楽しい」、「難しい」など、1語のみの回答が目立ち、イメージの拡がりを感じられない。回答に上がっているダンスイメージ語も、「楽しい」、「カッコイイ」などのダンスに対する志向性を表す言葉が多く、表現形式に言及した記述は、数例見られただけであった。ダンスを外から見た視覚的イメージがほとんどで、創作者としての視点からのイメージは、やはり、乏しい。これに対し、2014年度は、共起関係において、それぞれの語が結びついていて、「体を動かして表現して楽しい」や「みんなで揃えて美しい」などダンス体験に関わるイメージが回答されている。このイメージは、経験者の割合が高い2012年度、2015年度にも共通しているが、経験者割合の多い年度で、体験したからこそ生まれるイメージが多いのは、当然であろう。

以上のように、経験の有無とイメージ語数との関係をみると、経験者が多い年度の方が、1人が回答する語数も多く、共起関係を表した図を見れば明らかのように、共起関係も複雑になっている。経験が豊かになれば、ダンスに対するイメージが質、量ともに多くなり、ダンスの持つ多様性に気づくと考えられる。

高等学校までのダンスへの関わりによって、多くの人が、「ダンス＝楽しい」と考えており、一定の肯定的イメージが出来上がっていると推察できる。しかし、否定的なイメージ言葉である「難しい」、「難しそう」、「苦手」も一定の割合で各年度にみられ、実際に自分がダンスをするには、抵抗感があることがうかがえる。一方、経験者の割合が多い年度は、未経験者の割合が多い年度に比べ、ダンスに対するイメージ語の語数、種類が増加する傾向がみられた。イメージ語同士の共起関係も多く、ダンスに対するイメージが多様で、複雑になっている。実際にダンスを経験することで、ダンスのいろいろな面に気づき、イメージが

膨らむと考えられる。

中学校体育科教員は、ダンス指導に特有の不安を持ち、「生徒の授業参加や動機づけ、授業構成に対する不安」、「教師自身の知識に対する不安」、「教員自身のダンス技術に対する不安」、「生徒のレベルやニーズに対する不安」の4因子が存在していると報告されている¹⁵⁾¹⁶⁾。この不安要素を取り除くダンス指導法の研究が、体育の教職課程を有する大学に求められていることである。先行研究でも指摘されているが⁴⁾⁶⁾、今回の調査により、質、量ともに豊かなダンス体験の機会を持つことが、ダンスの多様性を理解し、能力差に応じた、自分なりの表現の存在に気づくことにつながるということがわかった。これが、学生のダンス指導不安を減少させるためのダンス指導法に必要な要素の一つと考える。

本大学のダンス授業では、ダンスの多様性を理解するための試みとして、創作ダンス、フォークダンス、現代的リズムのダンスに加え、即興を取り入れている。即興でダンスをつくることで、自分なりの表現があることを実感できると考える。また、作品を創作する段階で、自分が考えた動きを踊り手に振り付ける場面をできるだけつくり、ダンスを指導する能力を高めている。さらに、世界の各地にある様々な民族舞踊をビデオで紹介し、ダンスがどこにでも存在し、身近なもので、様々な動きがあることを知る機会としている。今後の課題として、このダンス授業前後でのダンスに対するイメージの変化を調べ、不安のない指導法の検討をすすめることが挙げられる。

引用文献

- 1) 文部科学省 教育基本法 http://www.mext.go.jp/b_menu/kihon/houan.htm 2017.4.15 閲覧
- 2) 改正前後の教育基本法の比較 http://www.mext.go.jp/b_menu/kihon/about/06121913/002.pdf 2017.4.15閲覧
- 3) 中学校学習指導要領解説 保健体育編 http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afile/eldfile/2011/01/21/1234912_009.pdf 2017.4.15 閲覧
- 4) 宮本乙女、中村恭子：体育系大学における中学校ダンス必修化に対応したダンス指導法授業の検討—ダンス指導法授業を受講した学生の意識の変容を通して—、日本女子体育大学紀要 45, 141-153, 2015-03
- 5) 野中壽子、寺田恭子：車椅子ダンス時の動作と体圧集中の関係、名古屋市立大学人文社会学部研究紀要 19, 131-135, 2005-07-30
- 6) 武井正子、中村恭子、鹿島聖子：高等学校での運動経験の差によるダンスイメージの比較、順天堂大学スポーツ科学研究 第4号、32-41 (2000)
- 7) A.リチャードソン著、鬼沢貞、滝浦静夫訳：心像、11-16、紀伊国屋書店 (1973)
- 8) 中村 恭子：11教-27-口-61 教員養成課程におけるダンスの学習内容・目標評価と種目採択意欲の関係、第62回日本体育学会大会予稿集 273, 2011
- 9) 梅口耕一 KHcoder <http://khc.sourceforge.net/> 2017.6 閲覧
- 10) 森田哲夫、入澤覚、長塩彩夏、野村和広、塚田伸也、大塚裕子、杉田浩：自由記述データを用いたテキストマイニングによる都市のイメージ分析、土木学会論文集D3 (土木計画学)、Vol.68、No.5(土木計画学研究・論文集第29巻)、I_315- I_323, 2012
- 11) 石井千代江、武井正子：111XIO男女共修のダンス学習に関する基礎的研究 一男子学生のダンスに対するイメージの変容を通して日本体育学会大会号 (41B), 767, 1990-09-10
- 12) 石井千代江、武井正子：1112410男女共修のダンス学習に関する基礎的研究II一男・女学生のダンスに対するイメージの変容を通して日本体育学会大会号 (43B), 861, 1992-10-31 石井千代江、武井正子：112国F02男女共修のダンス学習に関する基礎的

研究Ⅲ—高校体育科教員のダンスに対する
イメージ—、日本体育学会大会号(44B),
780, 1993-10-05

- 13) 猪崎弥生、酒向治子、永田麻里子、田中俊之、
米谷淳：中学生のダンスイメージ、ダンス
に対する態度、ダンス授業の評価:質問紙
調査を基に、お茶の水女子大学 人文科学
研究 第9巻(2013)、PP.15-24
- 14) 酒向治子、永田麻里子、出原智波、宮本乙女、
猪崎弥生：中学生のダンスに対するイメー
ジ—男女差の検討—、岡山大学大学院教
育学研究科研究集録 第153号(2013) 97-
102
- 15) 山口莉菜、正田悠、鈴木紀子、阪田真己子：
ダンス必修化に伴う教員の指導不安の定量
的分析、情報処理学会第78回全国大会講
演論文集、2016、pp.913-914 2016-03-10
- 16) 山口莉菜、正田悠、鈴木紀子、阪田真己子：
体育科教員のダンス指導不安の検索的研
究、日本教育工学会論文誌、2017 41巻
125-135